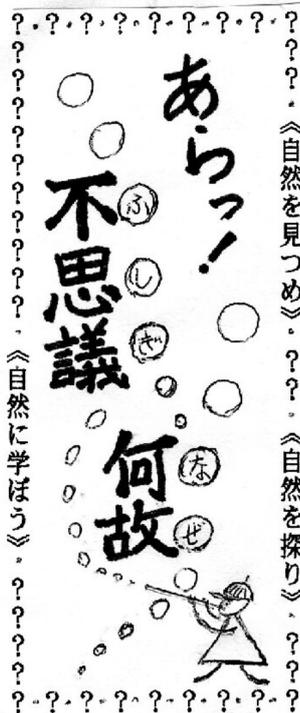


自然談議・科学談議



NO. 45

文・題字 渋谷 一夫

動植物の地下銀座

(天然記念物)

私たち人間は、自然保護を考える時、植物の開花や結実の様子に目が向けられている。だが、これら地上の花や結実の様子を人々の目に向けさせる原動力は、地下または地中にあるのではないか。

植物が立派に生長するには、地中の根や茎が大きく影響を与えていると思う。また、昆虫や小動物はその地中の根や茎から栄養分を摂ったり、地中の温度を上手に活用したりして生長しているのである。その動植物の地中生活というか地下生活というか、地下地中でも生活し易い場所や土質の良い場所など様々である。今回は、その動植物が集合して生活している場所を、私は勝手に自称して「動植物の地下銀座」と呼ぶことにしている。これから、その地下銀座というか地中銀座というか、その地中または地下の様子を記述してみたい。

「フキノトウ」と「フキ」

春二月になると、わが屋敷の一角に、毎年必ず「フキノトウ」が顔を出す。誰も世話をしているわけではない。自然のままだ。冬の寒さにも負けずにしつかりと土中に根を張っている「地下茎」から、春の訪れを感知して芽を出してくるのである。それも一個や二個ではない。百個近い数だ。

その「フキノトウ」は、三月から四月になると、沢山の花



フキノトウ

を咲かせ、そして私たち家族に「和え物」や「天ぷら」の食材を提供してくれている。やがて花期が終わると、あちこちに葉茎が顔を出し、辺り一面をフキの葉でうめつくし、私たちに食材を提供してくれる。そしてその期が終わると、土中では地下茎は枯れずにしつかりと根を張り、地中を横に張り巡らせ、また来春まで待つていくのである。

我が家の「フキ」は、我が子供の頃よりあったものであり、その宿根は百年以上前からあったものであり、また来年を期待している。地下茎は、冬の間に地上で大きく広げ

た葉っぱから充分に養分を吸収し、来年を待つていくれている。また、来年の春になると、「地下茎」より花茎という芽を出し、花を咲かせる。これが「フキノトウ」だ。それに続いて出てくるのが、「葉茎」だ。これが「フキ」である。この繰り返しで、我が家の一角で百年以上も生育してくれているのである。正に我が家の天然記念物だ。こういう自然の営みは、今後も保存していきたい。

「ミョウガ(茗荷)」

「フキノトウ」と同じように「ミョウガ」も地下茎による産物だ。この「ミョウガ」もわが屋敷の一角に毎年顔を



ミョウガ

出してくる産物だ。これも一個や二個ではない。数十個まとまって芽を出してくる。これからの六月、七月が楽しみだ。

この「ミョウガ」も「フキノトウ」と同じように土中に張り巡らされている地下茎の節から花茎として芽を出し、生長して地上に顔を出し、私たちに食材として提供してくれるのである。それが終わると、今度は自分自身が生きるための葉茎を地上に数十センチメートル伸ばし、長楕円形の大きい葉を広げて、太陽光を全身に受けて生長し、また来年の準備をしてくれているのである。

この「ミョウガ」も地上部分、毎年枯れてしまうが、地下茎は地中で百年以上も生き残っており、正に我が家の「天然記念物」と自称しているものである。

(次号へ)